
M I C E

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MICE

【著者名】

NO330E

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

私はMICE社西日本支店の営業課長兼宣伝モデル。消費者は私にこの私に魅了されてサブリを買つ。

「…美容も健康もたつた3錠で手にはいる。スーパーサプリメント『M・ICE』の効果は、この私が保証します！」

「カット、カット！その営業スマイルじゃ駄目じゃないか。監督の駄目出しに、新人が引きつった笑顔を引っ込める。

「うちのイメージに合うのは埼京さんしかいないな。埼京さんに代えてくれ。」

社長直々の指名。

そうよ、新人なんかにこの大役は任せられない。私は自然な笑みとともに前へ進み出た。

カメラの前に立つ時、私、埼京裕美は女優になる。スタイル、顔立ちはもちろん、肌のハリや髪のツヤまでカメラにさらす全てが魅せるためにある。私がカメラの前に立てば、それだけで宣伝になる。私は堂々と宣言する。

「『M・ICE』の効果は、この私が保証します！」

* * *

「埼京さん、お疲れ様です。」

『M・ICE』の通販進出のための番組撮影が終わった後、さつきの新人が声をかけた。私は鏡越しに彼女を見た。

ほんと、若さだけが取り柄つて感じね。

たつた10分の宣伝番組と言えども、撮影はスタジオで行われる。ここは番組出演者のための部屋。土壇場で降ろされた者が出入りする資格はない。

私は私が美しい私である事をじっくり確認するために鏡を見る。

新人はまだそこにはいた。

「私に何か？」

「あ、あの…すいません。」

新人は慌てて頭を下げた後、遠慮がちに「あのう…」と声をかけた。全くはつきりしない娘だ。今度の新規採用では、はきはきと応答できる子を取るようには会議で提案しよう。

「さつきの撮影のことはもういいわよ。」

私は鞄からスーパーサプリメントを取りだした。ストレスは美容と健康の敵だ。ストレスへの特効薬は、赤のサプリ。

「そ、それは…？」

「新しいサプリメントよ。」

この子つたら信じられない！新作のサプリも知らないなんて！ほんとにMICE社の社員かしら？

「新しい…、新作ですか？でも、さつきの宣伝では…」

「ええ。まだ表には出してないわ。」

私はMICE社西日本支店の営業課長、且つ宣伝モデル。消費者はこの私に魅了されてサプリメントを買っていく。目に見える効果、会社の実績、それは則ちこの私。

「市場に出る製品はね、全て私が試した後で出回っているの。」

* * *

次の日、6：30きっかりに私は目を覚ました。

毎晩寝る前に疲れを取る緑のサプリを飲むので、すつきりと朝を迎えるられる。

美容と健康に疲れは敵だ。

私は、紅茶に黄色の粉末サプリを溶かしながらテレビをつけた。MICE社が通販でサプリを売り出すことが話題になっているようだ。

私は紅茶をかき混ぜた。鮮やかな黄色がクルクル渦まいて、すっと溶けてゆく。

一段と明るくなつたカップの中に、私の顔が映つた。

ゆらり。

カップの中の顔が歪む。

思わず頬に手を当ててみる。

ぐにゅり

頬の肉が手に貼りつくよに、力なく垂れてきた。

嘘でしょ？

私は肉が落ちないよに、掌をぎゅっと押し当てた。

落ちる、垂れる、流れでゆく。

まるで水のよひご、頬の肉は形を変えて指の隙間からじぼれ落ちる。

どひり、たらり

ティーカップの中に落ちてゆく。そこには映るのは、もつ私ではなかつた。

「そんなん！私…の…」

口を開けば溶けた舌が溢れ出し、言葉が続かない。瞬きをすれば目玉が滑りだし、ティーカップの中の醜い顔が拡大される。

私の顔がつ！誰よりも美しい私の顔がつ！私の…私の…私のつ

…！

だんだん頭がぼんやりしてきた。意識が遠のく中で、私は脳みそが溶けているのだと悟つた。

ティーカップの中に目玉が、ぽちゃん、ぽちゃんと落ちていく。視界に広がる霧を払つように、私はやみくもに腕を振り回した。

* * *

がたん

硬い感触と鈍い痛みが右手を襲い、私は腕を引っ込んだ。目を開けると白い天井が広がっていた。

今のは、夢？

頬に手を当ててみると、いつもの弾力がかえつてくる。

夢で良かった。いいえ、夢から覚めて良かった。どうしてそんな恐ろしい夢をみたのだろうか？もしかしたら、疲れているのかもしない。昨日の撮影は、夜遅くまで続いた。新聞などによく話題になるように、MICE社の発展は目覚ましい。

美容と健康に疲れは敵だ。

私は、紅茶に黄色の粉末サプリを溶かしながらテレビをつけた。MICE社が通販でサプリを売り出すことが話題になっているようだ。私は紅茶をかき混ぜようとして、さつきの夢を思い出した。カップの中をのぞくのが、なんとなく躊躇われる。

まあ、いいわ。顔から洗いましょ。

* * *

三面鏡に映る私は、やはり綺麗な私だつた。きめ細かい泡が、顔だけではなく気持ちまで洗ってくれたようで、フローラルの香りが心地良い。

私はリビングに戻り、紅茶のカップを持ち上げた。

『…シワが…』

不意にテレビから嫌な単語が聞こえ、思わず手を止めた。

シワ？

頬に手を当てて、テレビの音量を少し上げる。

『…株式会社カシワが食品部門から撤退し…』

大手企業でも食品業界で生き残るのは難しいらしい。そんなニュースなのに、ホッとした。頬の確かな弾力よりも、このニュースが美容と関係がない事にホッとした。

私は衰えない、シワやシミとは無縁だ、と今まで強く信じてきたものが、どうしてこうも不安にさせるのだろう。

大丈夫、さつきの夢で敏感になっているだけだわ。

この仕事に就いて長い。きっと、それが知らないうちにストレスになっているのだ。

私は赤いサプリメントを取り出して、3粒を口に含んだ。しかし、水を用意していない。私は、サプリを舌で転がしながら水を求めてキッチンへ向かった。

その時、1つのカプセルが口の中で小さく弾けた。

苦い。カプセルの中身は、まるで生き物のように舌に絡みつき、感覚を麻痺させる。

苦い、苦い。

痺れが舌からこめかみへと伝染する。

私はたまらず、田の前の紅茶へ手を伸ばした。

『じくり、じくり

息を止めて紅茶を流し込む。口から喉、胃へと痺れが走る。同時に吐気が込み上げて、私は手で口を押さえた。

ぐにやり

顔の形が変わる。

“どうこう事？”

急に頬が弾力を失い、引力に従つようシワを刻みながら皮膚が垂れてくる。

「い、一体、どういう事なのっ！？」

気が付けば叫んでいた。その声は自分のものとは思えないほどかすれていた。

私は頬を押さえていた手を離して、さらに驚いた。一切の家事から守ってきた手が、徐々にひび割れ、かさつき、シミが現れたのだ。その、広げた掌の上に、パサリ、と灰色の塊が降つてくる。

髪の毛だ。

私は、背骨がミシミシと音をたてて丸まつしていくのを感じながら、髪の毛の雪の中で倒れた。

胃から喉へと逆流する熱いものを感じたが、歯のない口はそれを止める事はできなかった。

私は、床に吐き出された血の海の中で、テレビが取り上げているMICE社の話題を聞いていた。

* * *

社内食堂のテラスで一服していると、

「社長」と後ろから声をかけられた。

「抗ストレス剤の開発期間をもう少し延ばして下さい。」

振り返ると、我が社の傘下に入った株式会社カシワの研究部の男がいた。

「ほつ、君が申し出るという事は、何か安全上の問題が起きたのだね？」

「はい。服用によりサンプルA-025が死亡しました。」

男はそう言ってカルテを回した。

サンプルA-025：元々健康的で上質のサンプルだった。入社と

同時に実験体として使っていた彼女が、体調不良を訴えた事など一度もなかつた。それどころか、年を重ねるごとに美しさを増していく様子は、全ての人間を魅了した。

まさに最強のサンプルではあつたが、まあ、仕方ない。

「原因は？」

「まだ特定していませんが、副作用か他の薬との化学反応なのか、確認中です。」

研究部の男は、白衣のポケットに手を突っ込んだ。研究員と言うより医学生のように見える。

「この事は表に出すな。埼京裕美は海外の支店に転勤した事にでもしておけ。」

「…分かりました。」

男は一瞬躊躇つた後、小さく頭を下げた。

それで良い。

食品部門に手を伸ばしたカシワ社が失敗するのは目に見えていた。だからこそ、傘下に入れたのだ。

食品部門で赤字が出たら、MICE社の開発に携わる事。赤字が30億円以上に膨れあがつたら、すぐに食品部門から撤退する事。我ながら巧い取引きだ。

カシワ社が傘下に入る事で、また新たな事業が展開できる。健康食品、ジエナリック医薬品、化粧品…誰もが求める『美容と健康』を売り物にする。将来的には病院やエステにも事業を広げるつもりだ。

私はテラスから下界を見下ろした。この本社を頂点に、子会社が点在しているのが分かる。

我が社はネズミの様に社員の数を殖やしてゆく。そして、それは立派な実験体になる。

実験体、そうマウスだ。

「…君は、我が社のネーミングをどう思つかね？」

白衣の男に訪ねる。

「MICE…ネズミですか？」

分かつているじゃあないか。

口角が自然と上がる。

「今度、若い男性をターゲットにしたサプライメントを売り出したいんだが…どうだね？」

私は次のサンプルのネームプレートを素早く盗み見た。

* * * END

(後書き)

社員が実験台となる事で、安全確認とサブリの効果を宣伝をしていますね。

こんな会社は嫌だ〜（汗）

埼京さんは急に老婆になつて…実年齢が気になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0330e/>

MICE

2010年11月20日03時14分発行